

1. はじめに 長濱ねると図書館・みたび
2. 図書館小説から「直木賞」
  - 2-1. 直木賞受賞作家と図書館
  - 2-2. 米澤穂信と『栞と嘘の季節』
3. 櫻井とりおと二つのシリーズ
  - 3-1. 『虹いろ図書館 司書先輩と見習いのぼく』
  - 3-2. 『図書室の奥は恋する相談室』
4. 児童文学作品と翻訳作品
  - 4-1. 児童文学作品の事例
  - 4-2. 翻訳作品の事例
5. 文庫書下ろし作品—『四十九夜のキセキ』
6. おわりに 図書館関係の話題とその扱われ方

1. はじめに 長濱ねると図書館・みたび

前前号・前号で、長濱ねるについて、2020年7月から、芸能界での活動を再開した後、さまざまなメディアで、図書館に関係する情報を発信してきていることを紹介したが、2022年も、そうした活動は継続されている。

2022年4月から、長濱ねるは、J-WAVEの番組に、毎週出演しているが、そのタイトルは、『BIBLIOTHECA ～THE WEEKEND LIBRARY～』であり、「BIBLIOTHECA」「LIBRARY」という図書館に関係した単語が使われている。番組のコンセプトについても、「本を通して未来へのヒントを探します」「この番組は週末にオープンする図書館」「司書は長濱ねるが務めます。ここには、よりよい社会や生き方のヒントが詰まったあらゆる本が所蔵されていて、その中から毎回テーマに沿って、日常の中で考えたり、前向きになるきっかけになる本を紹介します」「図書館の膨大なCD・LPコレクションから他ではめったに聴くことのできないレア音源を特別に試聴するコーナーも」といったように、図書館との関係性が意識されている。1)

2022年7月には、レギュラー出演しているテレビ番組『セブンルール』の-spinオフとして『長濱ねるのセブンルーツ』が放送された。その内容は、制作に関係しているテレビ局のwebサイトで、『セブンルール』のレギュラー出演者として活躍中の長濱ねるに、『セブンルール』スタッフが8カ月密着！彼女をカタチづかった7つのルーツを辿るドキュメ

「タリ番組」 「思い出の絶景ポイントや図書館、商店街などを巡る」と紹介され、訪問先のひとつとして図書館があげられている。2)

この番組についてとりあげた記事には、「3歳から7歳までの幼少期を過ごしたふるさと・長崎県五島列島で」「思い出の地や図書館、商店街を訪れる」とあり、インタビューでは「この場所は“自分の原点に戻れる場所”だったなと感じました」と述べている。この記事では、先にあげた J-WAVE 『NTT Group BIBLIOTHECA ～THE WEEKEND LIBRARY～』

に「長濱さんは司書として出演」としたあと、『長濱ねるのセブンルーツ』について、「番組では、思い出の図書館に再度足を踏み入れる」と紹介している。3)

さらに、長濱ねるは、2022年度後半、10月から放送されている、NHK朝の連続テレビ小説『舞いあがれ!』に、「東大阪から長崎・五島へと移住してくるヒロイン」を迎える島の住人「山中さくら」役で出演している。4)

この番組への出演については「長濱は五島出身」で「長濱と五島を映したコンテンツは数多く存在している」が「彼女に8カ月密着した『セブンルール』の特別編『長濱ねるのセブンルーツ』(フジテレビ系)は、彼女にとって五島がどういう場所なのかがわかるドキュメンタリー」で「奈良尾図書館は長濱が雑誌『ダ・ヴィンチ』(KADOKAWA)で連載を持つほど読書好きになるきっかけとなった場所」と紹介している記事もある。5)

また、『舞いあがれ!』に関するエピソードが語られたテレビ番組として、「長濱ねるが、19日放送の『ロコだけが知っている』(NHK)に出演。連続テレビ小説『舞いあがれ!』のウラ話を語った」6) 「長濱が今回再会したのは、母校・長崎の小学校の教員で図書室の先生でもあった有吉他己代さん。本が大好きだったという長濱は毎日のように通い、有吉先生のことを「アリヨッティ先生」と親しげに呼んでいたという」「図書館司書を目指していた時期もあった長濱。そのきっかけの1つは、有吉先生から薦められた『ちはやふる』だった。先生は作品について『すごい純粋な物語で、やりたいことを見つけてひたむきに進む』と解説しながら、『(ねるちゃんにも)共感してもらえないんじゃないかと思って(薦めた)』と語った」「『舞いあがれ!』で、ヒロイン・舞(幼少期は浅田芭路)に影響を与える五島の女性・さくらを演じている長濱。その役を演じるうえで参考にしたのは有吉先生だったそうで、『自分にとって憧れの人は誰だろうと思った時に有吉先生が浮かんで、(舞が憧れるさくらは)有吉先生みたいな存在なんだなって考えてドラマにも活かしていた』と告白。さらに『有吉先生がいてくださった長崎の時間が、今の原動力になっている』とも振り返ると、先生は『ほんとに! ?ありがたい』と感動していた」と、小学生時代に交流のあった、学校図書館の担当者が、現在出演中のドラマの役作りにも影響していることが語られている。7)

先の記事にもあったように、長濱ねるは、職業として「図書館司書」を意識していた時期もあったが、最近では「本屋さん」をあげており、「私は、子ども・青少年育成に興味を持っています。本好きとして、その面白さを伝えたいという思いもあるので、本屋さんがないような地域へ、私が車を運転して本を運ぶ『移動式本屋さん』をすることが、30歳

までにはかなえない夢の一つです」と述べている。8)

筑摩書房『webちくま』の「リレー書評」では、「各界で活躍されている方たちが読みたてホヤホヤをそっと教えてくれるリレー書評。今回は、タレントの長濱ねるさんに、読書のよろこびを、今にまで続く“好き”を教えてくれた児童書の名作をご紹介します」とされている回で、「私は図書館が好きです。物心ついた頃から家の近くに図書館がありました。小学生の頃引っ越した先でも、なぜだか近くに図書館がありました。「あの頃の私にとって、本はどこか知らない場所へ連れていってくれる魔法の切符。毎日、司書の先生に『日が暮れたからそろそろ帰りなさい』と言われるまで、夢中でいろんな世界を冒険していました」としている。さらに、ロアルド・ダール『マチルダは小さな大天才』の「図書館の本を全て読んでしまいました」という一文に感化されて、「図書館の本を読み尽くすという壮大な目標を掲げました」というエピソードを語り、児童書を2冊紹介している。9)

こうした長濱ねるの読書やその周辺領域に関する情報発信については、読書週間に発表された記事の中で、『若者の読書離れ/活字離れ』ということばが語られて久しい。「そんな中で読書の楽しさと、そこから得られる体験の素晴らしさを語り続けている若きスター」「女優・タレントの長濱ねるに注目したい」と、読書に関係するインフルエンサーとしての観点から、以下のように長濱ねるにふれたものもあった。そこでは、「読書家で知られる長濱は、将来の夢を『地元（長崎県長崎市）に帰って司書になること』として、ラジオ等で実際に勉強していることも明らかにしている。両親が共働きで図書館で過ごすことが多く、母親が読書家だったこともあり、子ども時代から本に親しんできたという」とし、「読書の楽しさを伝えているインフルエンサーは少なくない。そのなかでも際立った存在感のある長濱ねるは、出版業界からも注目を集め続けることだろう」と結んでいる。10)

前号では、「メディアに登場する20代の女性として、これほど、継続的に、図書館に関係するテーマについて言及している人物は、これまで、ほとんど見られなかったといえるくらい、長濱ねるは図書館に関係する情報を発信してきている」と紹介したが、そうした状況は継続されていると言えよう。

注)

1) 『NTT Group BIBLIOTHECA ～THE WEEKEND LIBRARY～』2022.4.2～  
J-WAVE 土曜 15:00～15:54

<https://www.j-wave.co.jp/original/bibliotheca/>

2) 「長濱ねるのセブンルーツ」『フジテレビ』

[https://www.fujitv.co.jp/b\\_hp/7roots/index.html](https://www.fujitv.co.jp/b_hp/7roots/index.html)

3) 「長濱ねるインタビュー “原点” 五島列島で気づいた『本当の自分』」『TVガイドweb』  
2022.7.1

<https://www.tvguide.or.jp/feature/feature-1623389/>

4) NHK 『舞いあがれ!』

<https://www.nhk.or.jp/maiagare/>

なお、番組名の表記については、NHK の表記に従った。

5) 「長濱ねるが“原点”の場所で放つ輝き 必然だった『舞いあがれ!』の出演」

『Real Sound 映画部』2022.10.14

<https://realsound.jp/movie/2022/10/post-1152726.html>

6) 『ロコだけが知っている』

<https://www.nhk.jp/p/locodake/ts/8RXJGJKLZZ/>

7) 「長濱ねる、『舞いあがれ!』役作りの参考は小学生時代の図書室の先生」『エンタメ

RBB』2022.10.22

<https://www.rbbtoday.com/article/2022/10/20/203034.html>

なお、この人物について、前号では、長濱ねるは『ダ・ヴィンチ』に連載しているエッセイ「夕暮れの昼寝」で「昼休みは、がらんとした図書室で司書のありよってい先生と談笑するのが毎日の楽しみだった。次は何の本読もうかな、この本いれてください。美人さんで本に詳しいありよってい先生は私の憧れだった」「“司書の先生”小学生の私が初めて認識し、興味を持った職業だった」と書いていることを紹介した。

この人物について、ふれた『ダ・ヴィンチ』の記事は、以下のもの。

長濱ねる「朝ごはんから始まる夢 夕暮れの昼寝 第六寝」『ダ・ヴィンチ』2021.3、pp.164-165

この点を紹介した、前号の記事は、以下のもの。

佐藤毅彦「2021年 コロナウイルスの拡散が継続する中での図書館状況と図書館小説」『甲南国文』vol.69、2022.3、pp.48-80

8) 「長濱ねると学ぶSDGs 『子どもたちに本を運びたい。移動式本屋さんが30歳までの夢!』長濱ねるのSDGs連載 HAJINERU SDGs」『with online』

2022.1.26

<https://withonline.jp/lifestyle/neru-nagahama/sMSGi>

9) 「昨日、なにを読んだ? File75. 今も続く“好き”と出会った本」2022.1.26、『webちくま』

<https://www.webchikuma.jp/articles/-/2692>

ここで紹介されているのは、以下の2件。

あんびるやすこ作・絵『なんでも魔女商会』シリーズ、岩崎書店

<https://www.iwasakishoten.co.jp/special/majyo/>

くぼしまりお・作 佐竹美保・絵『ブンダバー』シリーズ、ポプラ社

<https://www.poplar.co.jp/book/search/result/archive/4080.05.html>

10) 「長濱ねるはなぜ出版界でも注目を集めるのか 『読書の日』に考える、読書家インフルエンサーの存在感」『Real Sound』2022.10.27

<https://realsound.jp/book/2022/10/post-1165088.html>

## 2. 図書館小説から「直木賞」

図書館や図書館員を、複数の作品に登場させてきた作家について、これまで分析の対象としてきたが、そうした中には、さまざまな文学賞を受賞しているケースも存在している。多数ある「文学賞」の中でも、「芥川賞」とともに、一般的な注目度の高い「直木賞」<sup>1)</sup>については、図書館と関係のある小説を手がけた作家が受賞している例が数多く存在する。

### 2-1. 直木賞受賞作家と図書館

阿刀田高は、1935年生れ。<sup>2)</sup>早稲田大学文学部卒。国立国会図書館に司書として勤務しながら執筆活動を続け、1979年『ナポレオン狂』<sup>3)</sup>で、「1979年上期第81回直木賞」を受賞している。日本ペンクラブ会長などの役職を歴任するかたわら、山梨県立図書館長に就任し、現在は、山梨県立図書館名誉館長となっている。<sup>4)</sup>国立国会図書館に勤務した時期があり、山梨県立図書館長も経験した阿刀田高が発表した小説作品に、図書館・図書館員が登場しているものは数多くあるが、たとえば、『夜の旅人』<sup>5)</sup>は、専門図書館的な機能をもつ「東京ゲーテ記念館」の創設に力を注いだ「粉川忠」の伝記的な作品とされ、直木賞を受賞した『ナポレオン狂』は粉川をモデルにしたといわれている。<sup>6)</sup>

小池真理子は、1952年生まれ。<sup>7)</sup>成蹊大学卒。1978年、エッセイ『知的悪女のすすめ』<sup>8)</sup>を刊行し、1995年『恋』<sup>9)</sup>で「1994年下期第114回直木賞」を受賞している。多数発表された小説作品には、図書館や図書館員が登場するものが含まれており、分析の対象としてきた。公共図書館に勤務する女性職員をヒロインとする『蠍のいる森』<sup>10)</sup>を取り上げたケース<sup>11)</sup>、「女子校の図書館司書」が主要な登場人物となっている『欲望』<sup>12)</sup>を中心に、図書館員や図書館を利用する人物が扱われている複数の作品を取り上げたもの、<sup>13)</sup>などがそれにあたる。

篠田節子は、1955年生まれ。<sup>14)</sup>東京学芸大学卒。東京都八王子市役所勤務を経て、1997年、『女たちのジハード』<sup>15)</sup>で、「1997年上期第117回直木賞」を受賞している。<sup>15)</sup>市役所勤務の中で、八王子市立図書館に勤務していた経験があり、<sup>16)</sup>そうしたことから、図書館を利用して調べ物をする人物や図書館の職員を、多くの小説作品に登場させており、それらについて、分析対象としてきた。<sup>17)</sup>なお「観覧車」(『秋の花火』収録)<sup>18)</sup>に登場する女性図書館員については、別に論じている。<sup>19)</sup>

東野圭吾は、1958年生まれ。<sup>20)</sup>大阪府立大学卒。当代の人気作家のひとりだが、1985年、『放課後』<sup>21)</sup>で「江戸川乱歩賞」を受賞し、精力的に作品を発表してきた。複数回にわたって「直木賞」候補となるが、受賞には至らず、2006年、『容疑者Xの献身』<sup>22)</sup>で、「2005年下期第134回直木賞」を受賞し、他にも『白夜行』<sup>23)</sup>などをはじめとして、コンスタントに作品を発表し続けている。東野圭吾の小説には、登場人物が図書館で調べ物をしたり、図書館員と会話を交わしているシーンが多数含まれており、分析の対象としてきた。<sup>24)</sup>

門井慶喜は、1971年生まれ。25)同志社大学卒。2009年、図書館のレファレンスサービスを扱った『おさがしの本は』(雑誌『ジャーロ』に連載中のタイトルは「レファレンス・カウンターの難問」)26)を刊行しており、この作品については、分析の対象に取り上げている。27)その後、実在の人物を扱った、伝記的作品を手がけるようになり、宮沢賢治の父親を主人公にした『銀河鉄道の父』28)で、2018年、「2017年下期第158回直木賞」を受賞している。

現在でも、図書館を舞台としたり、図書館員が主要なキャラクターとして描かれている小説を複数発表している作家は、前号で取り上げた『麦本三歩の好きなもの』の著者、「住野よる」、前号に続き、本稿の次章でもとりあげた「図書室」シリーズの著者「櫻井とりお」、など一定数存在する。29)今後は、それらの中から、「直木賞」をはじめとする文学賞を受賞して、一般的な関心を集めるケースが出現することも考えられ、そのことが、図書館に対するある種の関心を惹起することにつながる可能性もある。図書館に関係するストーリーを複数発表してきている作家で、2022年に直木賞を受賞したのが、以下で扱う「米澤穂信」である。

## 2-2. 米澤穂信と『栞と嘘の季節』

米澤穂信は1978年生まれ。30)金沢大学卒。初期作品の『氷菓』31)では、高校の図書室とそれに関係する生徒が扱われていたが、以降の作品でも、図書館に関連のあるストーリーを複数発表してきており、『本と鍵の季節』32)は、高校生の図書委員を主要なキャラクターとした作品で、分析の対象として取り上げた。33)その後、時代小説を手がけるようになり、2022年、『黒牢城』34)で、「2021年下期第166回直木賞」を受賞している。

米澤穂信が、『黒牢城』で直木賞を受賞した後に発表した、『本と鍵の季節』と同じ設定・登場人物による作品が、『栞と嘘の季節』35)である。『栞と嘘の季節』は、高校の学校図書室を舞台としていて、『本と鍵の季節』でも登場した、高校の図書委員をしている、堀川次郎と松倉詩門が、メインキャラクターとなっている。

### ◎学校の図書室と貸出管理

この小説の舞台となるのは、架空の地名である「北八王子市」(p.11)に存在する「市内で一、二を争う進学校」で「短大を含めた大学進学率は八割強」(p.30)という高校の図書室である。

図書室に返却された『薔薇の名前』に、栞が挟まっていたが、「本を返す際は返却箱に入れるだけでよく、その箱には蓋がない」(p.8)。「図書室の貸出履歴はコンピュータで管理されていて、誰がいつどの本を借り、延滞しているのか、すべてがデータで保存されている。ただし、そのデータは誰も見ることができない。誰がどんな本を必要としたのかは人の心そのものを映し出し、それを覗き見る権利は誰にもないからだ」。「とはいえ借りた本を返してもらはないと困るし、返せというためには誰が本を借りているのかを知る必要があるわけ

で、つまりここに矛盾がある」(p.9)、という状況から、ストーリーが展開していく。図書委員の一人である堀川は、「ほかの図書委員はどう考えているか知らないけれど、僕と松倉は、図書室の利用者の秘密は守ると決めている。誰がどの本を借りていったかは、それぞれ警察が令状でも持ってこない限り、誰にも教えることはない」(p.113)と考えている。

#### ◎図書委員と「司書の先生」

前作の『本と鍵の季節』と同じく、高校生の図書委員である、堀川・松倉のふたりが中心となって展開するストーリーで、図書室に関与する大人の存在感は希薄である。『栞と嘘の季節』の中に、「司書の先生」という表現は出ているが、その存在が具体的に描かれることはない。たとえば、延滞者に対して図書委員が督促状を作成している際に、「延滞者リストをプリントアウトしてくれれば楽なのに、司書の先生はそれを認めてくれない」(p.10)という場面の後に、返却された本を図書委員がチェックするシーンがある。「図書室に返却された本には、よく何かが挟まっている」。市販の文庫本についてくる栞、コンビニのレシート、進路調査の用紙、など以外にも「一度などは、千円札が挟まっていたことさえあって、これは司書の先生に預けることになった」(p.17)という状況のように、現金を扱う場面で、やっと「司書の先生」の存在が図書委員の意識に浮上しているが、逆に言えば、そうしたことでもない限り、その存在は、図書委員からもあてにされていない、といえる。また、図書室の管理について、「一時間目の授業が終わったところ」で、図書委員が「教室を出て図書室に行くと、誰もいなかった」。「貸出を担当するはずの司書教諭さえいない。もともと、司書の先生は相当に多忙らしく、図書室に姿を見せることはほとんどないのだけれど」(p.71)と説明されている。さらに、五時間目の授業のあと、「僕は図書室に向かう。休み時間のたびに図書委員が図書室の係を務めていては、まともに授業が受けられない。なので休み時間には、司書の先生がカウンターに入る。……そのはずなのに、ぼくが図書室に行くと、カウンターには図書委員がいた」(p.128)とあるように、「司書の先生」が図書室にいるのが当然の場面ですら、不在なこともあるということで、学校の図書室に関与する「司書の先生」については、実際に確認できる存在として、描写されている場面は、ない。

#### ◎読書についての受け止め方

図書委員の堀川は、「小学校では読書が推奨されていて、休み時間に本を読む同級生は珍しくなかった」。「それでクラスから浮くということはなかったと思う」。「中学校で、がらりと変わった。教室で本を読むのは自分は変人だと主張するに等しく、同質性を身につけなければ危害さえ加えられかねない中学校という空間にあって読書は挑戦的な行為だった」。「この高校は過ごしやすい。誰がどこでどんな本を読もうが、誰も気にしない」。「とはいえこれまで、ぼくが昼休みの教室で本を読むことはほぼなかった。別の場所でも読めるのに取って教室で読むことに、ちょっと銜いを感じるからだ。ただ、今日読んでいるのは小説ではなく、自分としては読書ではなく調べ物、いわば勉強をしている感覚が強い。教室で勉強を

するのは当たり前のことだ」(p.96)と感じていることが示されており、「読書」という行為に対する高校生の方の考え方の一端が、図書委員の堀川の描写を通して表わされている。

米澤穂信は、初期の作品『氷菓』で、高校の図書室やそれと関係する生徒を描き、以降も図書館や図書館を利用する人物を登場させてきたが、「直木賞」受賞後に発表された『栞と嘘の季節』でも、学校の図書室やそれに関与する図書委員の生徒たち、学校の図書室での利用記録の扱いと、利用者のプライバシーとの関連などを扱っている。「直木賞」を受賞するような、一定の評価をえている作家が、作品に図書館や図書館を利用する人びとを取り入れることによって、図書館がある種の社会的な注目を集めることにつながっていく可能性もあるといえるのではないか。

注)

1) 「直木三十五賞」

<https://www.bunshun.co.jp/shinkokukai/award/index.html#naoki>

上記の「公益財団法人 日本文学振興会」の web サイトでは、「新進・中堅作家によるエンターテインメント作品の単行本（長編小説もしくは短編集）のなかから、最も優秀な作品に贈られる賞です（公募方式ではありません）。」とされている。

2) 「阿刀田高 著者プロフィール」 新潮社

<https://www.shinchosha.co.jp/writer/644/>

3) 阿刀田高『ナポレオン狂』講談社（講談社文庫）、1982←講談社、1979

4) 「阿刀田名誉館長の部屋」『山梨県立図書館』

<https://www.lib.pref.yamanashi.jp/meiyokancyo/>

5) 阿刀田高『夜の旅人』文藝春秋（文春文庫）、1986←文藝春秋、1983

<https://books.bunshun.jp/ud/book/num/9784167278076>

6) 粉川哲夫（東京ゲーテ記念館館長）「東京ゲーテ記念館のこと——粉川忠生誕百年の折に（2007年記）」『学士会会報』867号（2007年11月1日発行）より転載

『東京ゲーテ記念館公式サイト』

[https://goethe.jp/history\\_tk.html](https://goethe.jp/history_tk.html)

7) 「小池真理子 著者プロフィール」 新潮社

<https://www.shinchosha.co.jp/writer/1446/>

8) 小池真理子『知的悪女のすすめ』角川書店（角川文庫）、1981←山手書房、1978

9) 小池真理子『恋』新潮社（新潮文庫）、2002←早川書房、1995

10) 小池真理子『蠍のいる森』集英社（集英社文庫）、1987

11) 佐藤毅彦「女性図書館員の恋愛“解禁”小説日米事例研究『蠍のいる森』とOpen Season（翻訳タイトル『パーティーガール』）について：図書館はどうみられてきたか・8」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol. 43、pp. 59-68、2007. 3

12) 小池真理子『欲望』新潮社（新潮社文庫）、2000←新潮社、1997

13)佐藤毅彦「日本の女性ミステリ作家と図書館・続 小池真理子・雨宮町子のケースについて 図書館はどうみられてきたか・4」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.39、pp.41-53、2003.3

14)「篠田節子 著者プロフィール」 新潮社

<https://www.shinchosha.co.jp/writer/1706/>

15)篠田節子『女たちのジハード』集英社（集英社文庫）、2000←集英社、1997

16)たとえば、下記のインタビュー記事の中でも、「1980年代に東京都八王子市の職員として、市立図書館の設立の関わった」とされている。

「篠田節子さん『図書館の蔵書、政治的な意図が反映されてはいけない』『朝日新聞』、2022.10.31

<https://www.asahi.com/articles/ASQBW539PQBGPTIL01M.html>

17)佐藤毅彦「図書館員出身作家のメンタリティ その2 篠田節子のケースについて 図書館はどうみられてきたか・11」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.46、pp.13-27、2010.3

18)篠田節子「観覧車」（『秋の花火』収録）文藝春秋（文春文庫）、2007←文藝春秋、2004  
<https://books.bunshun.jp/ud/book/num/9784167605094>

19)佐藤毅彦「図書館はどうみられてきたか・7 図書館員出身作家のメンタリティ 女性作家が描く女性図書館員像」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.42、pp.65-81、2006.3

20)「東野圭吾 著者プロフィール」 新潮社

<https://www.shinchosha.co.jp/writer/2592/>

21)東野圭吾『放課後』講談社（講談社文庫）、1988←講談社、1985

22)東野圭吾『容疑者 X の献身』文藝春秋（文春文庫）、2008←文藝春秋、2005

23)東野圭吾『白夜行』集英社（集英社文庫）、2002←集英社、1999

24)佐藤毅彦「図書館はどうみられてきたか 日本のミステリ作家と図書館員—東野圭吾・法月綸太郎のケースについて」『甲南女子大学研究紀要』vol. 36、pp. 155-179、2000. 3

上記の発表以降に刊行された作品に関して、『容疑者 X の献身』は、下記の、注) で扱った。

佐藤毅彦「図書館はどうみられてきたか・7 図書館員出身作家のメンタリティ 女性作家が描く女性図書館員像」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.42、p. 26、2006. 3

『白夜行』については、以下でふれた。

佐藤毅彦「2005年の図書館“員”像 ベストセラー小説のテレビドラマ化で図書館はどのように描かれたか『いま、会いにゆきます』『白夜行』のケースについて」『同志社図書館情報学 同志社図書館学年報』（32号別冊/通巻17号）、2006、pp. 17-43

25)「門井慶喜 プロフィール」 ブックバン

<https://www.bookbang.jp/reviewer/article/553291>

- 26) 門井慶喜『おさがしの本は』光文社（光文社文庫）、2011←光文社、2009
- 27) 佐藤毅彦「図書館法改正と『メディアの中の図書館のイメージ』 法改正の年に文学作品に描かれた図書館は？ 事例研究『レファレンス・カウンターの難問』を中心に 図書館はどうみられてきたか・10」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol. 45、pp. 1-13、2009. 3
- 28) 門井慶喜『銀河鉄道の父』講談社（講談社文庫）、2020←講談社、2017
- 29) これらの作家について扱った、前号の記事は、以下のもの。  
佐藤毅彦「2021年 コロナウイルスの拡散が継続する中での図書館状況と図書館小説」『甲南国文』 vol.69、2022.3、pp.48-80
- 30) 「米澤穂信 著者プロフィール」 新潮社  
<https://www.shinchosha.co.jp/writer/3268/>
- 31) 米澤穂信『氷菓』角川書店（角川文庫）、2001
- 32) 米澤穂信『本と鍵の季節』集英社（集英社文庫）、2021←集英社、2018
- 33) 佐藤毅彦「2018年の図書館状況と図書館小説」『甲南国文』 vol. 66、pp. 1-24、2019. 3
- 34) 米澤穂信『黒牢城』角川書店、2021
- 35) 米澤穂信『栞と嘘の季節』集英社、2022. 11

### 3. 櫻井とりおと二つのシリーズ

櫻井とりおについては、前号でも取り上げたが、図書館・図書館員が関係する小説を、『虹いろ図書館』シリーズ 1)、『図書室の奥は』シリーズ 2)、という、二つのシリーズ作品として、本稿執筆時点（2023年1月）までに、それぞれ4点、3点、発表してきている。なお、前号で、これらを分析対象とした際にもふれたが、櫻井とりおは、図書館に勤務していた経験がある。3)

#### 3-1. 『虹いろ図書館 司書先輩と見習いのぼく』

出版社のwebサイトでは「高校卒業後、憧れの図書館で働き始めた犬上健介。しっかり者の青柳先輩、破天荒な霜月先輩たちの背中を追いかけながら、立派な図書館員を目指すけれど——？ 大人気シリーズ、第4弾！」「犬上健介、18歳。今日から憧れの図書館で働きます。心が虹いろになる、青春×お仕事×図書館小説！ 大人気シリーズ、イヌガミさん編スタート！」「高校卒業後、小さい頃から大好きだった図書館で働き始めた健介。しっかり者の青柳先輩、破天荒な霜月先輩たちの背中を追いかけながら立派な図書館員を目指すけれど、基本は人見知りで内気。初めての電話、お客さんの質問、読み聞かせ、と毎日大変！ そんなある日、いたずらっ子ちーが現れて——？」と紹介されている。

『虹いろ図書館のへびおとこ』で、「顔の右半分が緑色」(p. 10)の職員と紹介されていた「イヌガミさん」が、図書館に勤めはじめた直後の時期のストーリーである。『虹いろ図書館 司書先輩と見習いのぼく』でも、「ほぼ右半分はみどりいろのアザで覆われている。髪

の生え際のおでこから、ひざの下のまでびっしりだ。右腕にも右手の甲にもある」(p. 11) という描写になっているが、そのこともあって、「やっぱりぼくは他人が怖い。話しかけたり話しかけられたりするのはもちろん、僕の存在を知られるのがとにかく怖い」(p. 44) と、感じている。その犬上さんが、新人研修を経て、実際の図書館業務を担当する中で、さまざまな体験を通して成長していく過程が描かれている。

### 3-2. 『図書室の奥は恋する相談室』

このシリーズは、中等部・高等部のある「リベルタス学園」を舞台としており、前作と同様に「図書室は吹き抜けになっていて、天井は普通の教室の倍くらい高い。その天井まで届きそうな重厚な階段状の書架が印象的だ」(p. 14) と紹介される。

図書委員会への入会を希望する中学一年生の『『図書室の蔵書はこれだけなのですか』』という問いに、委員のひとりが『『別室に保存書庫もありますが、主に学園や地域の古い資料や教材ばかりで、読み物や調べ物の本はほとんどフロアに出ています』。『改めて階段状の書架を見ます。立派な木製の書架は十段ほどあるが、本が入っているのは下から五段目くらいまでで、残りは空っぽだ』。『昔な、なんか「電子書籍のほうが優れてます」ブームみたいなのがあって、紙の本をごっそり捨てちゃったんだって』』とこたえる対話が交わされている (pp. 14-15)。

『『図書委員の「相談室」には、うちの学園の生徒がいろんなお悩みを相談にやってくる』』『オレら図書委員も、超絶優秀な知恵と勇気と行動力で解決する。そしたら、依頼人は報酬として、オレらの指定した本を図書館に寄贈する。そういうシステムだ』』(p. 16) というように、前作と同様の体制がとられていることが紹介され、そのあとは、図書委員の生徒が持ち込まれた相談に対応していく様子が描かれている。

注)

1) 櫻井とりお『虹いろ図書館のへびおとこ』河出書房新社、2019

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309028385/>

櫻井とりお『虹いろ図書館のひなとゆん』河出書房新社、2020

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309029221/>

櫻井とりお『虹いろ図書館のかいじゅうたち』河出書房新社、2021

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309030098/>

櫻井とりお『虹いろ図書館 司書先輩と見習いのぼく』河出書房新社、2022.12

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309030821/>

2) 櫻井とりお『図書室の奥は秘密の相談室』PHP 研究所、2021

<https://www.php.co.jp/books/detail.php?isbn=978-4-569-78973-6>

櫻井とりお『図書室の奥はあやしい相談室』PHP 研究所、2022.2

<https://www.php.co.jp/books/detail.php?isbn=978-4-569-88038-9>

櫻井とりお『図書室の奥は恋する相談室』PHP 研究所、2022.9

<https://www.php.co.jp/books/detail.php?isbn=978-4-569-88075-4>

上記のwebサイトでは、最新刊の『図書室の奥は恋する相談室』について、「リベルタス学園中等部図書委員がさまざまな相談事を解決していく連作短編の第3弾！新たに1年生ふたりが加入。人のオーラや未来が見え、家は新興宗教の教会という理由でいじめられてきたミコと、そのミコと小学時代同じクラスで、ミコのことが気になっているレン。でもミコは、はづきのことが気になっているようで…一方通行の図書委員の恋の行方は？」と紹介されている。

3)『虹いろ図書館 司書先輩と見習いのぼく』の奥付には、「都内区役所職中、およそ10年間公立図書館で勤務」と記述されている。

『図書室の奥は恋する？相談室』の奥付には、「2020年度まで関東圏の公立図書館に勤めた」と記述されている。

#### 4. 児童文学作品と翻訳作品

児童文学や翻訳に関しては、図書館がストーリーに関係する多くの作品が発表されているが、2022年度は、これまでとは少し違った側面が扱われているものがふくまれている。なお、翻訳の児童文学は、児童文学作品の中で扱った。

##### 4-1. 児童文学作品の事例

『病院図書館の青と空』1)は、小5の女の子が、入院中の病院に患者向けの図書館があると知り、「あおぞら図書館・ここは患者さんのための図書館です」という手書きのポスターがはってある部屋に入ってみる。『長くつ下のピッピ』の本を開くと、さし絵の中に引っ張り込まれてしまい、そこで出会った少女との交流が描かれる。

『水まきじいさんと図書館の王女さま』2)では、手話で会話をする小学生の男女が、市の図書館にいと、黒くて長い髪の「王女さま」みたいな女の人」が、しおりを挟んだまま本を返却してしまい、それが借りられてしまったので借りた人を教えてくれないか、とやってくる。そのことに興味をひかれたふたりは、しおりのゆくえを追いかけ、「王女さま」みたいな女の人」から、しおりにまつわる話をききだす。

『本おじさんのまちかど図書館』3)に登場する、女の子のヤズミンは、学校帰りに、より道をして、「本おじさんの〈まちかど図書館〉」で本を借りるのを楽しみにしていた。あるとき、市に図書館について苦情の手紙を出した人がいて、市から通知があり、図書館は続けられなくなる。ヤズミンは、市長の選挙があることを知り、他の子どもたちとともに、市長選挙の候補者たちに手紙を書く。

病院図書館や図書館内で手話を使って会話する子どもたち、市長選挙の候補者と図書館への対応、など、これまでは、児童文学の中で、図書館とのかかわりが注目されることが少

なかった要素が、作品に取り上げられている。

児童文学のシリーズものでは、「ふつうの女の子に見えるけど、じつは人間ではありません」「たぶん吸血鬼です」「ノダちゃんは人間にかみついて血をすったりはしないので、べつにこわくはありません」(p.10) という「ノダちゃん」と「小学生のサキちゃん」が「図書館ではたらいっている」「ししよのおねえさん」や「いちにんまへのししよになるためにべんきょうしている」「ししよこちゃん」(「おもなとうじょうじんぶつ」(p.5)の記述)のふたりと図書館で出会って、さまざまな体験をする『なのだのノダちゃん』シリーズ、4)「10歳の女の子、タリー」が「ひみつの地下図書館」と、そこにある「本の持つ魔法の力」で、さまざまな困難な状況乗り越えて成長していく、『ふしぎな図書館』シリーズ、5)の中で、2022年には、図書館と関連があるストーリーが刊行された。両者とも架空の状況設定の中で、ファンタジー的な内容となっている。

#### 4-2. 翻訳作品の事例

翻訳作品で図書館が扱われているケースは、これまでも多数あったが、たとえば2022年に翻訳が刊行された『あの図書館の彼女たち』6)では、「本書の主人公オディールは」「幼いころから図書館に馴染んで育った」が、彼女は「パリのアメリカ図書館に就職する」。

「現在もパリに実在する図書館」である。「パリにありながら英語の書籍や定期刊行物を提供する、アメリカ文化の発信基地」で、「貴重な文化交流の場」であり、世界大戦の時代には「このうえなく危険な場所」とみなされることもあった。パリが「ナチスの占領下」にあった時代、「この図書館は占領下のパリにおける“自由な世界への窓口”」であった。著者は当時の職員の活動を知り「詳しい調査」や「関係者から直接話を聞く」などのことをしたうえで、「図書館を愛する一人の女性を主人公にした魅力的な物語を生み出した」と、紹介されるストーリーである。7)一方、『ミッドナイト・ライブラリー』8)は、「生と死の狭間にある“真夜中の図書館”」(表紙カバー)「この図書館の書架には涯がありません。そしてここにあるどの本もが、あるいはあなたが生きていたかもしれない人生へと誘ってくれる。もしもあのとき違う決断をしていたら物事はどれほど違っていたか。それを教えてくれるのです」(p.50)といった、登場人物の一人の発言に象徴されるように、幻想的な図書館を舞台とした内容のものとなっている。

その他にも「キャンパス内の」「(ウインダム図書館)で、学生の死体が発見された」。「その遺体のそばには古書が一冊」あった、という事件からはじまる、文庫オリジナルのミステリ作品『ウインダム図書館の奇妙な事件』9)も、2022年に翻訳が刊行されている。

注)

1) 令丈ヒロ子『病院図書館の青と空』講談社、2022.4

講談社のwebサイトでは、以下のように紹介されている。

<https://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000363637>

「転校したばかりの小5の空花は、体調を崩して入院中。その病院に、患者向けの「あおぞら図書館」があると知り、本好きの空花は大喜び。早速図書館に行って大好きな本を開いたら、さし絵の中に引っ張り込まれてしまった。本の中で待っていたのは、アオと名乗る少女。さし絵のクッキーを自由に食べ、思ったことを口にする、空花にとって、うらやましいくらい自信のある、のびのびした子だった。二人は、たびたびさし絵の中で会い、仲良くなっていくが、ある日大げんかに。仲直りの機会がないまま、空花の退院が決まって……。

〈小学中級から〉

「表紙カバー」には、「わたし、小五の空花は入院中。患者向けの図書館で、大好きな本を開いたら、本の中からあまい、いいにおいがしてきて、青い服を着た女の子が現れた！その子に手首をぐいと引っぱられ——気づくとわたしは、さし絵の中にいた」と記されている。

巻末の参考文献には、数多くの児童文学作品とともに  
菊池佑『病院患者図書館 患者・市民に教育・文化・医療情報を提供』出版ニュース社、  
があげられている。

2)丸山正樹・作 高杉千明・絵『水まきジイサンと図書館の王女さま』偕成社、2022.7

偕成社のwebサイトでは、以下のように紹介されている。

<https://www.kaiseisha.co.jp/books/9784036355303>

『デフ・ヴォイス～法廷の手話通訳士』（文春文庫）で話題をさらった丸山正樹氏、初めての児童書。「デフ・ヴォイス」シリーズとして、その後『慟哭は聴こえない』（東京創元社）など続篇を刊行中。本作は、そのスピンオフ版として書かれたもので、コーダ（ろう者の両親の家庭で育った聴者の子ども）である主人公の手話通訳士の再婚相手の子ども美和と、シリーズ2作目に登場する友だち英知の学校を舞台に繰り広げられる。「水まきジイサン」「図書館で消えたしおり」「猫事件」「耳の聴こえないおばあさん」などのストーリーが、ミステリーの要素も加わり、少しずつリンクしていく。美和は義父から習った手話が使える。発達障害や場面かん黙症という特性をもつ英知も、人前で話すことができないが手話を習得していて、二人の会話は手話である。」

「表紙カバー」には、「わけあって手話で会話する美和と英知、異色のストーリー」「図書館で、たいせつなしおりをなくした女の人」とストーリーの一部が記載されている。

巻末の「著者紹介」では、「丸山正樹」について、「コーダ（ろう者の両親の家庭で育った聴者の子ども）である手話通訳士を主人公にしたミステリーで、話題となり、続編の『龍の耳を君に』『慟哭は聴こえない』『わたしのいないテーブルで』などが次々と刊行される。他の作品に『漂う子』『ワンダフル・ライフ』などがある。児童書はこの作品が初めて」と記されている。

3)ウマ・クリシュナズワミー作 長友恵子訳 川原瑞丸絵『本おじさんのまちかど図書館』フレーベル館、2022.5

フレーベル館のwebサイトでは、以下のように紹介されている。

<https://www.froebel-kan.co.jp/book/detail/9784577050583/>

「ヤズミンは、本おじさんのまちかど図書館で本を借りるのが毎日の楽しみ。ところが、何者かの通報により図書館が続けられないことに。本おじさんを助けたいヤズミンは、市長選挙に目をつけ、行動を起こす！」

「表紙カバー」には、「ぴったりの日に、ぴったりの人に、ぴったりの本を——そんな本おじさんの〈まちかど図書館〉で、一日一さつ本を借りるのが、わたしの楽しみ。なのにだれかが苦情の手紙を書いて、本おじさんは図書館を続けられなくなってしまった！だから、わたしはとんでもなく大きな計画を考えた。この図書館を守るために」と紹介されている。

4) 如月かずさ・作 はたこうしろう・絵『なのだのノダちゃん びっくり図書館』小峰書店、2022.3

小峰書店のwebサイトでは、以下のように紹介されている。

<https://www.komineshoten.co.jp/search/info.php?isbn=9784338295062>

「図書館で出会ったのは司書見習いの不思議な女の子。ノダちゃんとサキちゃんは本の修理や読み聞かせの練習を手伝うことに……。」

「表紙カバー」には「図書館で出会ったのは司書見習いの不思議な女の子。ノダちゃんとサキちゃんは本の修理や読み聞かせの練習を手伝うことに……。」と紹介されている。

「なのだのノダちゃん」シリーズは、2023年1月時点で、以下の6冊が刊行されている。

如月かずさ・作 はたこうしろう・絵『なのだのノダちゃん ふしぎなコウモリガサ』小峰書店、2015

如月かずさ・作 はたこうしろう・絵『なのだのノダちゃん ひみつのわくわく七ふしぎ』小峰書店、2016

如月かずさ・作 はたこうしろう・絵『なのだのノダちゃん まほうの自由研究』小峰書店、2017

如月かずさ・作 はたこうしろう・絵『なのだのノダちゃん おねがい流れ星』小峰書店、2020

如月かずさ・作 はたこうしろう・絵『なのだのノダちゃん おもちの国へようこそ』小峰書店、2021

如月かずさ・作 はたこうしろう・絵『なのだのノダちゃん びっくり図書館』小峰書店、2022.3

5) 「ひみつの地下図書館」シリーズは、2023年1月時点で、1～4巻が、刊行され、それぞれの内容が、ほるぷ出版のwebサイトで、紹介されている。

アビー・ロングスタッフ作、代田亜香子訳、阪口友佳子絵『ひみつの地下図書館1 クモの巣で大さわぎ?!』ほるぷ出版、2022.4

<https://www.holp-pub.co.jp/book/b604508.html>

アビー・ロングスタッフ作、阪口奈緒・代田亜香子訳、阪口友佳子絵『ひみつの地下図書館2 消えた子犬をさがせ!』ほるぷ出版、2022.6

<https://www.holp-pub.co.jp/book/b607097.html>

アビー・ロングスタッフ作、二木夢子・代田亜香子訳、阪口友佳子絵『ひみつの地下図書館 3 真夜中のゆうれい?』ほるぷ出版、2022.9

<https://www.holp-pub.co.jp/book/b612239.html>

アビー・ロングスタッフ作、石垣賢子・代田亜香子訳、阪口友佳子絵『ひみつの地下図書館 4 あたらしい船出』ほるぷ出版、2022.11

<https://www.holp-pub.co.jp/book/b616057.html>

なお、シリーズ完結記念として、翻訳者座談会が、公開されている。

シリーズ完結記念 翻訳者座談会 前編

<https://www.holp-pub.co.jp/news/n50066.html>

シリーズ完結記念 翻訳者座談会 後編

<https://www.holp-pub.co.jp/news/n50067.html>

6) ジャネット・スケスリン・チャールズ 高山祥子訳『あの図書館の彼女たち』東京創元社、2022.4

東京創元社webサイトでは、以下のように紹介されている。

<http://www.tsogen.co.jp/np/isbn/9784488011130>

「1939年パリ。20歳のオディールは、アメリカ図書館の司書に採用された。本好きな彼女は水を得た魚のように熱心に仕事に取り組み、女性館長や同僚、そして個性豊かな図書館利用者たちとの絆を深めていく。やがてドイツとの戦争が始まり、図書館は病院や戦地にいる兵士に本を送るプロジェクトに取り組み始める。しかしドイツ軍がやってきてパリを占領し、ユダヤ人の利用者に危機が訪れ……。」「1983年アメリカ、モンタナ州フロイド。12歳の少女リリーは、“戦争花嫁”と呼ばれる孤独な隣人、オディールと知り合いになる。リリーはオディールの家に入り込んでフランス語を教わるようになり、二人の間には世代を超えた友情が芽生えていく。だがリリーは、しだいにオディールの謎めいた過去が気になりはじめ……。」「人々にかけてがえのない本を届け続けた、図書館員たちの勇気と絆を描く感動作！」

「表紙カバー」では、著者の「ジャネット・スケスリン・チャールズ」について紹介する中で、「パリのアメリカ図書館でプログラム・マネージャーとして働いた経験を活かし、『あの図書館の彼女たち』を執筆した」と記述されている。

7) 上記の図書の巻末「訳者あとがき」(pp. 457-460)に、みられる記述。

8) マット・ヘイグ 浅倉卓弥訳『ミッドナイト・ライブラリー』ハーバーコリンズ・ジャパン、2022.2

ハーバーコリンズ・ジャパンのwebサイトでは、以下のように紹介されている。

<https://www.harpercollins.co.jp/hc/books/detail/14234>

「その図書館には“選ばなかった人生”が待っていた」「生きている意味などもうないと、ノーラは衝動的に自らの命を絶とうとする。だが目覚めたとき、目の前には不思議な図書館

が佇んでいた——。」

「表紙カバー」では、「生と死の狭間にある“真夜中の図書館”」「どこまでも続く書架には無数の本が並び、その一冊一冊に、あなたの人生が綴られている。あの日、あの時、違う選択をしていたらありえたかもしれない、あなたの人生が——。」と紹介されている。

9)ジル・ペイトン・ウォルシュ 猪俣美江子訳『ウィングダム図書館の奇妙な事件』東京創元社（創元推理文庫）、2022.11

同書の巻末の「解説」では、ウィングダム図書館から始まった事件は、謎の死と失踪が相次ぎ、そこに古書の盗難が絡んだ意想外の展開を遂げていくのだ（p.305）と記述されている。

## 5. 文庫書下ろし作品—『四十九夜のキセキ』

単行本として刊行され、数年後に文庫化されるというかたちをとらず、はじめから文庫本として刊行される作品は、近年増加しているが、そうした中でも図書館が扱われている例がある。『四十九夜のキセキ』は、公立図書館に勤めているという設定の女性が、主要な登場人物となっている。1)著者の天野頌子は、本書の「あとがき」で、「学生時代、大学の附属図書館でアルバイトをしたことがあります」。「しかしそれだけの乏しい経験ではさすがに里帆の職務内容をカバーしきれ」なかったので、「現役司書のゆみさんにいろいろ教えていただきました」と述べている。2)図書館司書の女性と、「自分は幽霊で、一緒に漫画を描いていた親友に憑依している」（裏表紙カバー）という男性との交流が中心に描かれ、現実ばなれしたストーリー展開ではあるが、図書館の職員である「鈴村里帆」やその勤務先の「武蔵野市立井の頭図書館」（p.23）には、現実の状況が反映されている。

### ◎「鈴村里帆」と勤務する図書館

『四十九夜のキセキ』で、「図書館司書」の「里帆が勤めている武蔵野市立井の頭図書館は、吉祥寺駅から徒歩五分ほどのにぎやかな商業地区にあり、少し足をのばせば、緑豊かな井の頭公園が広がっている」。「地上一、二階と地下一階の三フロアがあり、開館時間は午前九時半から午後八時まで」（p.23）という設定になっている。3)

里帆の「仕事内容は、図書の貸し出し、問い合わせへの応対、破損した図書の補修、購入図書の選定、利用促進のための企画立案と報告書の作成、チラシやポスターの作成、季節ごとのディスプレイなど幅広い。時には本のとりあいでけんかになった子供たちの仲裁をすることもある」。「昨夜から午前中にかけて返却されてきた図書がたまっていたので、背表紙のラベル順にならべてワゴンにのせ、書架へともどしていく」（p.23）というように業務内容が描写されている。

図書館に就職するまでの経緯や就職後の状況については、「里帆が今の図書館に配属されてからは五年がたつ。子供のころの夢は小説家になることで、東京の大学の文学部に進学した。しかし何度か投稿した作品は受賞にいたらず、公立図書館の司書へと目標を切りかえ、

在学中に司書の資格をとるための講座をとった。武蔵野市の職員採用試験に合格したところまでは順調だったのだが、最初の配属先は市役所の住民課で、毎年、異動希望をだし続け、四年めにようやく井の頭図書館に配属されたのである。仕事量が多いが、基本的には穏やかな職場である。時には利用者がトラブルをおこしてあわてることもあるが」(p.24)とされている。地方公務員としての自治体職員の採用試験に合格し、市役所の住民課に配置されて数年経過した後に、異動で図書館に配置されたという設定になっている。その後の異動可能性についてはふれていないが、図書館司書の専門職としての採用試験を実施している自治体、という設定ではないので、現実の状況にてらしてみると、このあと、図書館から他の部署への異動も考えられることになる。

業務内容については、「読書週間の企画案を三本考え、来月の新刊を確認し、幼児むけのおはなし会のポスターをはって、メールでのレファレンス依頼に返事を書く」(pp.27-28)。「井の頭図書館では、職員によって勤務形態は様々だが、里帆の場合、午前九時から午後五時までの早番と、午後一時から八時までの遅番のシフトの日がある」が「翌日の月曜日は遅番だった」(p.33)。「カウンターでの仕事はほとんどが貸し出しと返却だが、探しものの依頼もしばしばある。『幕末の吉祥寺の地図はありますか?』というかなり限定されたものから『昨日テレビで紹介されていた本を読みたいんだけど』というふわっとしたものまで、様々だ」(p.41)などのように、レファレンスサービスへの対応なども含めて、日常業務が描写されている。

#### ◎図書館のスタッフ

この図書館で働いているスタッフについては、以下のように、それぞれのカテゴリ別に、代表的な人物が取り上げられて、説明されている。

##### ・今井悠人

「学生アルバイトの今井悠人」は「武蔵野美術大学の学生で、明るい茶髪を刈り込み、いつもぴったりしたスキニーパンツをはいている」。「専攻は彫金なのだが、絵もかなり上手いので、ポスターやフリーペーパーを作成する時には頼りになる存在だ」(p.47)。

##### ・小平健三 (館長)

「館長の小平健三」は「小平は四十代後半の温厚なおじさんで、丸くふくよかな頬がチャームポイントである。紙フェチといってもいいくらい紙でできた製品を愛しており、書籍はもちろん、新聞も必ず紙のものを読んでいる」(p.47)。

##### ・野島幾子

「ベテランパートの野島幾子」は「週に三回だけとはいえ、三十年近く井の頭図書館で働いているので、生き字引のような存在だ。特に地域史の図書に関しては、彼女の右にでるものはいない」(p.51)。

##### ・落合彩音

「派遣会社からきている落合彩音」は「二十代半ばの小柄な眼鏡女子だが、少女漫画をこ

よなく愛し」ている。「マンガ以外にも、小説、ゲーム、アニメ、ドラマ、アイドルとあらゆるエンタメに精通しており、オタクの申し子のような存在だ」(p.51)。

図書館で実施する企画について、館長が「事務室にいた二人」に意見を求め、野島や落合が、それに応えている場面もある (pp. 50-51)。

現代の図書館にみられる、さまざまな雇用形態で勤務している職員の存在を前提として、それぞれのカテゴリに属する人物をひとりとりあげ、その雇用形態にあったキャラクターや職務内容を描いている。近年、現実の図書館で起きている、さまざまなメディアで取り上げられているような、雇用条件をめぐるネガティブな話題には、ふれられていない。

### ◎企画展示

図書館司書の女性と、「自分は幽霊」で「一緒に漫画を描いていた親友に憑依している」(裏表紙カバー)という男性との交流が描かれる中で、すでに亡くなっているという設定のこの漫画作家について、企画展示を図書館で実施することが計画される。物語の舞台となっている「武蔵野市立井の頭図書館」にはコミックスは、はいていないという設定だが、「同じ出版社からでている中高生向けのノベライズ本は大人気で、常に予約待ちだ」(p.39)ということで、「うちの図書館でも、読書週間の企画として、追悼コーナーをつくるというのはどうだろう？ ノベライズ本だけでは弱そうだから、関連図書もそろえて」(p.40)と、里帆は考え、館長には、「『これを機に……』というと語弊がありますが、小説を読まない中高生にも、興味を持ってもらえればと思ひまして』と説明する。「図書館に来る学生がみな小説好きというわけではない。友だちと宿題をやるためだけに来る子もいれば、ファッションや音楽などの雑誌がおめあての子もいる。ふだん図書館に足をはこばない人たちにも、『海賊サムライ』目当てで来てもらえれば言うことなしだが、それはさすがに欲張りすぎだろう」(p.50)と里帆は、思っていた。

図書に来館したり、さまざまなかたちで図書館を利用している学生の状況を理解した上で、里帆は、図書館の選書方針をふまえて、コミックスを直接置くことはないが、ノベライズや関連資料を活用した企画展示を提案して、実現していく。

### ◎図書館から漫画作家のアシスタント業務へ

その後、里帆は、さまざまな関係者と交流するうちに、亡くなった漫画作家がてがけていた、漫画制作を手伝うことを依頼され、図書館の仕事との両立は難しいということで、「マネージャー兼アシスタントということで、漫画に専念」してほしいと提案される (p.269)。

「せっかく公務員の、しかも正規の司書になれた」。「市役所勤務の間、毎年図書館への転属願をだし続け、ようやく井の頭図書館に配属された時の嬉しさはよく覚えている」(p.271)が、館長には、自分の年齢になると冒険はできないが「『鈴木君は違うでしょう？ 冒険できるのは今のうちだよ』と言われる (p.272)。「一度退職したら、もう、公務員に戻ることは難しいだろう。単年度契約なの司書になら戻れるかもしれないが、かなり不安定な生活に

なる」(p.272) という状況も理解しているが、最終的には、「退職願を提出」(p.273) することになる。

司書資格をもち、公務員の正規職員として、市立図書館に勤務している女性が、「自分は幽霊」で「一緒に漫画を描いていた親友に憑依している」という男性と交流する中で展開するさまざまな状況が描かれ、最終的には、周囲の人物との関係性や、みずからの今後の人生を考えて、図書館から他の業界に転職する、というストーリー展開になっている。

他の文庫書下ろし作品としては、『横浜・山手図書館の書籍修復師は謎を読む』などで、タイトルに「図書館」が使われていた。4)

注)

1)天野頌子『四十九夜のキセキ』光文社(光文社文庫)、2022.11

文庫書下ろし

表紙カバーでは、天野頌子について、「東京外国語大学ドイツ語学科卒業。らいとすたっふ小説塾一期生として学び、2005年『警視庁幽霊係』でデビュー」と紹介されている。

らいとすたっふ会社概要

<http://www.wrightstaff.co.jp/free.php?fid=1>

2)「あとがき」天野頌子『四十九夜のキセキ』光文社(光文社文庫)、2022.11、pp.282-287

上記の「あとがき」には、「今回ほど自分の経験が元ネタになっていながら、役に立たなかった作品は初めてかもしれません」。「まずは図書館の業務について。実は私自身も、学生時代、大学の附属図書館でアルバイトをしたことがあります。その時の業務内容は、カウンターでの貸し出しと返却の受付、および、返却されてきた図書の書架への戻しでした。バイト代は格安でしたが(汗)、貧乏学生だったので、冷暖房がきいているのがとても嬉しかったのを覚えています」。「しかしそれだけの乏しい経験ではさすがに里帆の職務内容をカバーしきれません。そんな時はあれですよ。本職にきけ! というわけで、現役司書のゆみさんにいろいろ教えていただきました。ゆみさん、お忙しい中、ありがとうございました」(pp.282-283)と、記述されている。

「ゆみさん」が、どのような図書館の「現役司書」なのかは、言及されていない。

3)「武蔵野市」は、現実に存在する地名だが、この小説での勤務先にあたる「武蔵野市立井の頭図書館」という名称の図書館は、武蔵野市内には、実在しない。本文中の「井の頭図書館」は、「吉祥寺駅から徒歩五分ほどのにぎやかな商業地区」(p.23)にあるという記述になっているが、このような設定に該当する施設としては、「武蔵野市立吉祥寺図書館」があり、こちらをモデルにしていると考えられる。

武蔵野市立吉祥寺図書館

<https://www.library.musashino.tokyo.jp/contents?1&pid=34>

上記のwebサイトでは、「吉祥寺の街の中に位置するこの図書館は、吉祥寺駅の近くにあり、通勤・通学や買い物途中に立ち寄れる図書館として多くの方に利用されています。大

きなケヤキの木がシンボルツリーになっています。」「サンクンガーデンから明るい光が差し込む地下1階には一般図書、1階には新聞・雑誌コーナー、展示コーナー、予約資料コーナー、ICTコーナー、そして2階にはティーンズ向け図書、児童書・絵本、多目的室があります。」と紹介されている。

なお「井の頭図書館」という名称ではないが、三鷹市には「三鷹市立井の頭コミュニティセンター図書室」が存在する。

三鷹市立井の頭コミュニティセンター図書室

<https://www.library.mitaka.tokyo.jp/contents;jsessionid=0539074C6716F4C6F14EE9D8118341C1?0&pid=196>

4)宮ヶ瀬水『横浜・山手図書館の書籍修復師は謎を読む』宝島社（宝島社文庫）、2022.11

巻末の「参考文献」には、

NPO 法人書物研究会編、板倉正子監修、野呂聡子ストーリー・絵『図書の修理 とらの巻』  
国立国会図書館収集書誌部資料保存課『平成28年度資料保存研修 簡易補修テキスト』

など、資料修復に関係すると思われる文献があげられている。

## 6. おわりに 図書館関係の話題とその扱われ方

2023年の年頭、関西を中心に無料で配布されている、住宅関連企業の作成する雑誌『スーモ 新築マンション関西版』に「魅惑の図書館 本のある街 最新図書館10選」（表紙の写真は「子ども本の森 神戸」というタイトルの記事が掲載された。1）「今の図書館は本を借りるだけの場所ではない。子どもたちの居場所や地域コミュニティの拠点にもなっている」「新たな図書館が続々と誕生 魅力的なサードプレイスに」といった前提のもと、「今回は、2018年以降にオープンした魅惑的な“新”図書館のある街をご紹介します」としている。特集では、最寄り駅・図書館名の順に「三宮 子ども本の森 神戸」「西神中央 神戸市立西図書館」「河内松原 読書の森 松原市民図書館」「守山 守山市立図書館」「和歌山市 和歌山市民図書館」「箕面船場阪大前 箕面市立船場図書館」「寝屋川市 寝屋川市立中央図書館」「名谷 神戸市立名谷図書館」が、写真とともに各館の特徴についてのコメントをつけて紹介されている。また、「ピン芸人のヒコロヒーさん」が、「図書館生活」について「学校の図書室や地元の図書館など、本のある場所に行くのは昔からの習慣だった」。「住まいの近くに使い勝手の良い図書館があることは大切なポイント」で、「新しい街に引っ越したときは、1週間以内に近所の図書館まで足を運び、館内の雰囲気を見に行く」などと語っている。新築マンションの案内を目的とする雑誌に、新たな図書館施設がその魅力とともに掲載されていることは、住宅関連企業のがわが、図書館が住まい選びのポイントにひとつになり得るという見方が一般にも共感されるであろうと、考えていることを示している。

関西地区での購読が想定されている雑誌であるため、紹介されているのも、関西周辺の図書館となっているが、2022年には、全国で新たな図書館施設が開館して、多くの利用者が

来館していることが報道されている。ニュースで取り上げられた新たな図書館施設としては、鹿児島市立天文館図書館、石川県立図書館、神奈川県立図書館新館、などがあった。2)

これらは、図書館の施設に関して話題となった事例だが、たとえば、2021年から『ヤングマガジン』に連載されている『税金で買った本』は、「税金で買った本なのだから、なくしたら弁償しなければならない」という方針を取っている図書館が存在する、などのように利用者からはみえにくい図書館のさまざまな実態を描いて注目をあつめた。2022年には、テレビ番組で人気芸人がコメントしたことなどから、より多くの人びとに知られる作品となった。連載の初期には、文字通り「税金で買った本」なので、図書館で借りた本をなくしたら弁償しなければならない、という規則に関連したエピソードが描かれたが、最新巻では、現代の公共図書館に存在する多様な雇用形態の職員やその契約状況などを背景とするストーリーが展開されている。3)

図書館関係のメディアでも、「公益財団法人 図書館振興財団」の機関誌『図書館の学校』に、原作者のインタビューが掲載された。4)この記事では、『アメトーク!』(2022年3月10日放送)で「麒麟の川島明さんが劇押ししたことで話題を呼んだ」『税金で買った本』の「原作者」と紹介される「ずいのさん」にインタビューを行っている。『ヤングマガジン』に連載中の“図書館系”お仕事マンガで「原作を担当しているずいのさんは図書館勤務経験のある、司書資格をお持ちの新進気鋭の漫画家」。「大学で日本文学を研究」し「司書資格を取り」「図書館に8年ほど務めていた」。「図書館のなかで知られていないことを軸に」「図書館周りの地味な情報を入れ込んで現実にできるだけ近づけつつ、登場人物たちが成長していくようなお話」になるといいかと思ったという。既存の作品は「本がたくさんある楽しい場所としての図書館、夢のような場所としての図書館を取り上げ」ていて、実際にはちょっと違うと思うこともあり、「本を循環させる仕組みそのものを物語に」したという。また、「図書館には全国的に統一されているルールと自治体任せだったり各図書館任せだったりで統一されていないルールもあることがわかった」。「同じ公立図書館でも運用に違いがあることに」驚いた。「本の貸出延長についてのルール」や、「本の購入も考え方がわかるテーマ」で、「税金で買う」から「資料として価値のある本を充実させるべきだと考える人も」いるし、「多くの人が読みたい、売れている本を購入すべきだと考える人も」いる。「ずいのさん」は『さまざまな役割を持つ図書館には正解がない。だから難しい』と述べている。

なお、このシリーズについて、『週刊文春』のマンガ書評のページでは、『税金で買った本』はそんな私の大好きな図書館を舞台にしたお仕事漫画で「図書館あるあるがリアリティをもって描かれている」。「図書館で働く人たちを悩ます嫌な利用者の解像度がやたらと高いのは、原作者が図書館勤務経験者だからこそ」。「本に興味を持ってもらうきっかけ作りや本を公平に届けるための司書さんたちの弛まぬ努力の描写に頭が下がる」。「誰でも無料で情報を得られる図書館という“弱者”に開かれた施設が、一見そうは見えない石平くんを救っていく過程に、図書館の福祉としての大きな役割を感じた」と、コメントされている。

5)図書館勤務経験のある作家が執筆した小説や、内容に図書館員がアドバイスをしているケ

ースは、これまでもあったが、この作品についても、原作者の図書館勤務経験が、ストーリーに反映されているといえよう。

こうした例のように、一般的な関心を集めるかたちで、メディアで図書館を扱っているものは、ほかにも多数あり、たとえば、2022年3月には、NHKテレビの土曜夜の番組で、図書館が取り上げられた。「ここまで進化！“図書館”お金のヒミツ」『有吉のお金発見 突撃！カネオくん』（2022.3.12放送）では、岡山県立図書館が、県立図書館として、一年間の来館者数・本の貸し出し数の日本一に何度もなっていることや、この図書館で稼働している「自動書庫」、「雑誌スポンサー制度」などについて、紹介していた。番組の後半では、東京都立中央図書館での本の修復の様子が紹介された。6)

一方、かつて、図書館での利用者のプライバシーに関する対応が注目を集めた、映画『耳をすませば』実写版が、2022年10月に公開された。雑誌『りぼん』に連載された、「柊あおい」による原作が、1995年に、「スタジオジブリ」制作によるアニメ映画として公開され、その際に、図書館の貸出管理に利用するカードや利用者のプライバシーの観点から、大きな話題を集めたが、今回の実写版は、そこまで話題にはならなかった。7)

実際の図書館現場では、非正規職員の雇用形態や待遇などの問題点が指摘されており、たとえば、2022年秋には、現場で働く職員のひとりが、ネット署名を開始したことが、報道された。8)

そうした状況の中で、図書館のあり方について、従来とは異質の方向性を前面に打ち出している人物が、自治体のトップに選挙でえらばれ、そのコメントに図書館にふれた部分が見られる例が出現した。2022年6月に実施された選挙で、僅差で当選した岸本聡子杉並区長は、かつて『水道、再び公営化』9)というタイトルの書籍を刊行したこともあり、こうした領域において、従来、多くの自治体で取られてきている施策とは、異なる考え方をもって人物である。雑誌のインタビューでは、公立図書館について「図書館は人々の共有財産」で「知の拠点としての文化的、社会福祉的な役割も担う」。「自治体の多くはこれまで公的施設を削減するなどコスト重視」だったが「区立施設や区の職員はコストではなく、杉並の財産」で「大切なのは公共施設や公共サービスを杉並区の直営でやること」であり「民間委託だとお金がどう動き、使われたかがわかりづらい」ので「限られた予算だからこそ大切に、透明性の高いやり方が必要」と述べている。10)このような首長の考えが、実際の自治体予算編成にどのように生かされていくのか、こうした方向性が他の自治体でも共有され、広がっていくのか、といった点は、未知数だが、今後の動向が注目される。

2020年以降は、コロナウイルスの影響で、多くの図書館が休館や入館制限を実施してきたが、「場」としての図書館について、「社会的インフラ」の存在意義に関係する議論の中で取り扱われている例がある。11) これは、アメリカでの事情をふまえたものだが、「社会的インフラとは抽象的な概念ではなく、図書館や公園、学校、運動場、市民農園など集団生活を条件づける物理的な場のこと」で、それらを「きちんとデザインして、構築し、維持し、投資すれば私たちはコミュニティーとしても、個人としても、幅広い恩恵を受けられる」と

いう (p.9) 主張の中で、図書館も「社会的インフラ」のひとつとして位置づけられている。

「はじめに」でとりあげたように、テレビやラジオの番組に多数出演し、芸能人として活動している長濱ねるは、図書館に関係のある情報を継続的に発信してきている。コミック『税金で買った本』については、人気芸人がテレビ番組で、その内容にふれたことが、多くの人たちに知られるきっかけのひとつとなった。そうした例のように、図書館については、多様なメディアの中で、さまざまなかたちで扱われており、それが図書館に対する社会的なイメージの形成にも影響を与えていると考えられる。

フィクションの中の図書館については、これまでも、たとえば「直木賞」をはじめとする文学賞を受賞した作家の作品で、図書館や図書館職員・利用者など、図書館に関係のある人々が扱われていることで、一般的な関心を集めるケースがあった。今後においても、そうした作家や作品が出現することで、図書館に対するある種の関心をひきおこすことにつながる可能性もある。

これまで、「直木賞」をはじめとする文学賞を受賞した作家が図書館を扱っている例を、分析の対象のひとつとしてきたが、近年は、実際に図書館勤務経験のある書き手や、図書館と関係のある人物に取材して、現代の図書館の実情を、より実態に近いかたちで反映した作品が発表されるようになってきている。日本の図書館現場での雇用状況や待遇は、改善の兆しが見えたとは言い難い状況だが、杉並区長の例や、アメリカでのケースを紹介したが、日本でも「社会的インフラ」としての図書館の存在意義が認知されることによって、その状況が多少とも変化していくことが期待される。フィクションの作品に描かれる図書館の実態はすべてが事実に基づいているというわけではないが、それによって、多くの人たちに図書館の存在が知られることで、図書館の現場に変化が生じることも起こりうるのではないか。

注)

1) 「魅惑の図書館 本のある街 最新図書館10選」『スーモ 新築マンション関西版』  
2023.1.17、pp.12-21

2) 鹿児島市立天文館図書館

<https://lib.kagoshima-city.jp/tenmonkan/>

石川県立図書館

<https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/>

神奈川県立図書館新館

<https://www.klnet.pref.kanagawa.jp/yokohama/teasersite/>

3) 原作：ずいの 漫画：系山罔 『税金で買った本』講談社

<https://kc.kodansha.co.jp/title?code=1000040652>

2023年1月までに単行本(1)～(5)が、刊行されている。

4)ずいの：漫画家・原作者、取材・文：品川裕香「interview 税金が投入され、納税者などが利用する公共図書館。そこでの「あるある」がおもしろいと評判のお仕事もの図書館マン

ガ』『図書館の学校』2022年秋号、pp.42-43

<https://www.toshokan.or.jp/magazine/>

6)「宇垣美里 宇垣総裁の漫画党宣言 万人に開かれた図書館に救われる」『週刊文春』2022.9.29、p105

6)「ここまで進化!“図書館”お金のヒミツ」『有吉のお金発見 突撃!カネオくん』2022.3.12  
<https://www.nhk.jp/p/ts/ZV9LQ94Z3R/episode/te/GNP1Q23Z5W/>

7)「耳をすませば」『キネマ旬報』2022.10月下旬号、No.1906、pp.77

たとえば、上記の記事では、「対談 清野菜名&松阪桃李」「インタビュー 西麻美(プロデューサー)」「コラム 北村匡平」が掲載されているが、図書館のカードや貸出方式にふれている部分は、ない。

実写版映画の公開(2022年10月)の前後に配信された

『ニュースレター 図書館の自由』第117号、2022年8月

『ニュースレター 図書館の自由』第118号、2022年11月

のいずれにおいても、冒頭の<もくじ>ページ、「図書館の自由・表現の自由をめぐる記事紹介」の「映画」の部分で、実写版「耳をすませば」に関する記述は確認できなかった。

1995年に公開された、アニメ『耳をすませば』については、下記でふれている。

佐藤毅彦「フィクションの中の貸出方式 映画『Love Letter』『耳をすませば』の問題点」『羽衣学園短期大学研究紀要 文学科編』Vol.32、1996.1、pp.1-19

佐藤毅彦「「学習の場」としての図書館は、どうみられてきたか 学校図書館と『耳をすませば』をめぐる論議の再考、とその周辺」『生涯学習時代における学校図書館パワー 渡辺信一先生古稀記念論文集』渡辺信一先生古稀記念論文集編集委員会編、渡辺信一先生古稀記念論文集刊行会、日本図書館協会(発売)、2005.3、pp.97-117

8)「図書館の司書は『情報のプロ』、でも待遇は… 国に期待する役割とは」『朝日新聞』2022.11.25

「ある市立図書館で非正規職員として働く女性司書が、ネット署名を始めた」と紹介されている。

このオンライン署名には、「70,627人の賛同者が集まりました」と報告されている。

「私は最低賃金+40円・手取り9万8千円で働く非正規図書館員です。図書館の今を知り、未来のために署名いただけませんか?」『change.org』

<https://www.change.org/p/%E7%A7%81%E3%81%AF%E6%9C%80%E4%BD%8E%E8%B3%83%E9%87%91-40%E5%86%86-%E6%89%8B%E5%8F%96%E3%82%8A9%E4%B8%878%E5%8D%83%E5%86%86%E3%81%A7%E5%83%8D%E3%81%8F%E9%9D%9E%E6%AD%A3%E8%A6%8F%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E5%93%A1%E3%81%A7%E3%81%99-%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E3%81%AE%E4%BB%8A%E3%82%92%E7%9F%A5%E3%82%8A-%E6%9C%AA%E6%9D%A5%E3%81%AE%E3%81%9F%E3%82%81%E3%81%AB%E7%BD%B2%E5%90%8D%E3%82%92%E3%81%84%E3%81%9F%E3%81%A0%E3%81%91%E3%81%BE%E3%81%9B%E3%82%93%E3%81%8B>

## 9) 杉並区長選挙 開票結果

<https://www.city.suginami.tokyo.jp/guide/kusei/senkyo/r04kuchoukugihoh/1077942.html>

岸本聡子『水道、再び公営化！ 欧州・水の闘いから日本が学ぶこと』集英社（集英社新書）、2020

同書の冒頭では、日本で民営化が可能になった上水道事業について、「民営化は、私たちの『水への権利』を奪うもの」で「欧州の水道事業は、民営化によって問題が山積している」。「水という権利を死因がその手に取り戻すことは、つまりは民主主義に他ならない。欧州・民主主義の最前線で、市民が試行錯誤しながら、何を生み出しているのか。それを本書では、できるかぎり、わかりやすく伝えていきたい」と述べられている。（pp.3-4）

10) 「岸本聡子杉並区長が独占告白 公共政策のスペシャリスト 『無作為で選んだ市民と対話集会を続ける』『サンデー毎日』2022.9.4、pp116-117

この記事では「コモンの価値を、区民の日常生活にまで落とし込むことが大切です。たとえば図書館は人々の共有財産です。具体的な建築物として人が集まる場所であり、知る権利を保障する社会インフラの役割も持つ。図書館をどう扱うかは自治体のリトマス試験紙です。『パブリック図書館の奇跡』『ニューヨーク公共図書館エクス・リブリス』などの素晴らしい映画がありますが、そこではスタッフは本の貸出だけでなく、講演会やパソコン講座、就職支援プログラムも行う。そういう知の拠点としての文化的、社会福祉的な役割も担うのです。自治体の多くはこれまで公的施設を削減するなどコスト重視でした。でも区立施設や区の職員はコストではなく、杉並の財産なのです」。「大切なのは公共施設や公共サービスを杉並区の直営でやることです。民間委託だとお金がどう動き、使われたかがわかりづらい。限られた予算だからこそ大切に、透明性の高いやり方が必要です」と述べられている。

11) エリック・クリネンバーグ著、藤原朝子訳『集まる場所が必要だ 孤立を防ぎ暮らしを守る「開かれた場」の社会学』英治出版、2021.12.31

上記の「第1章 図書館という宮殿」（pp.44-83）では、イーストニューヨークのニューロッツ地区にある図書館の施設やサービス内容、職員と利用者の状況が紹介されている。

（本文中で参照した web ページは、2023 年 1 月の時点で公開されていたものです。）